

対応・工夫【合理的配慮】

対応・工夫の内容	事例番号
<ul style="list-style-type: none"> ・ノートに書き写す対象が、正面の黒板から左90度の位置にある電子黒板の文字へと授業の流れの中で変化することで、姿勢が不安定になり、書き写す際の目の動きも複雑化して、書字に一層の困難さが見られる児童がいた。そのため、見る対象の位置が変化する際には、席の向きを対象の方に向けるなどの工夫を行った。また、書きづらいつ感じている児童には、その間机の向きを変えても良いことを確認した。 	事例1
<ul style="list-style-type: none"> ・段階的に書きの支援を行った。 <ul style="list-style-type: none"> ①書き出しの文字を記入：ノートにめあてやまとめを書く際、書き出しの文字だけを教師が記入した。 ②書く場所を枠で示す：どこに書けばよいか分かりやすいように、ノートに枠を書いて示した。 ③なぞり書き：児童がなぞり書きでノートを取れるように、マーカーペンで文字を記入した（鉛筆、赤青鉛筆の色に合わせてマーカーも色分け）。 	事例2
<ul style="list-style-type: none"> ・気分が高まったときには段ボールハウスを使用する（中に入る）ことを認めた。その際、使用するときには教師に必ず伝えることや使用時間を決めることなど、使用のルールを明確に設定した。 	事例2
<ul style="list-style-type: none"> ・ルールや手順をなかなか覚えられない児童に対しては、カードを小さく印刷して机に貼っておいたり、チェックシートを作成してその内容を確認できるようにしたりした。 	事例3
<ul style="list-style-type: none"> ・ルールややり方を伝える時には、絵カードなど視覚的な情報と言語指示を組み合わせるようにした。必要に応じてモデルを示し、繰り返して取り組むようにした。個別対応が必要な児童は座席を前にしたり、机間指導で対応したりした。 	事例4
<ul style="list-style-type: none"> ・クールダウンのスペースを設け、教室内で気持ちを調整できるようにした。 	事例5
<ul style="list-style-type: none"> ・勝手に離席するのではなく、「かきたくない」「したくない」「ふあん」「わからない」等の理由が書かれたミニカードの中から選び、担任に伝えることができるようにした。また、本児の気持ちを聞き取る際は、【Yes/No】の選択肢を示しながら会話をし、本児が○をつけて意思表示できるようにした。選択肢の中には、「わからない」や「その他」も入れ、その回答も認めるようにした。 	事例5
<ul style="list-style-type: none"> ・体育で新しい単元に入る際は、見通しと期待感がもてるよう、家庭と連携しながら、活動内容の説明を事前に行い、必要に応じて練習を行った。 	事例5
<ul style="list-style-type: none"> ・書きやすくするためにプリントの大きさをA3サイズに拡大した。 	事例6
<ul style="list-style-type: none"> ・登校しづりに関しては、理由を丁寧に聞き取り、どの時間の何になら参加できそうか、対象児童とやりとりするようにした。 	事例7
<ul style="list-style-type: none"> ・書くことに関しては、代替手段を活用して、タブレットで写真にとって確認したり、板書のコピーを渡したりするようにした。他にも、デジタルメモやノートテイク、デジカメの活用を行った。 	事例7

・ノートやワークシートは、枠を用意する(点線をなくし、実線のみをの枠にするなど)ことや、考える時間とまとめる時間を分けて、書く時間を十分に確保するなどした。	事例7
・発表することが難しい場合は、教師と一緒に言うこと、対象児童が書いたものを教師が読む等の選択肢を提示し、本児が選ぶことができるようにした。	事例8
・授業中、対象児童の「自分はこうしたい」という発言に対して、納得できるようなやりとりをした。	事例9
・学習の見通しを絵や図式ではっきりと表して確認した。	事例9
・行動を待ち、意識が教師に向くのを確認した後に、指示や号令などを出した。	事例9
・安心できるルールの共有と自己決定の尊重:離席を禁止するのではなく、「場所・時間・何をするか」を教師に報告すれば教室を出てクールダウンできるルールについて対象児童と合意形成を図った。	事例10
・書字負担を減らす(なぞり書き等)配慮を行い、「できる」経験を増やした。	事例10
・視覚的な支援を増やし、口頭でも答えられるようなやりとりを自然に行うようにした。	事例12
・対象児童がイライラして気持ちが高ぶっている時にどうすればいいかを周りの児童たちと一緒に考えた。何で怒っているのか、怒っている時にどうしてほしいかを話し合った。	事例13
・1日のスケジュールや活動の流れの提示、シングルタスク(考える時間と話し合いの時間を分ける等)、安心して自分の考えを伝えられるような工夫(付箋の用意やワークシートの工夫等)を行った。	事例14
・タイマー等を使って残り時間の視覚化をした。	事例14
○学校生活 ・授業や行事は、どのような形で参加するか、対象生徒と学校と話し合ったうえで決めた。 ・移動やトイレの際には、特別支援教育支援員がサポートした。 ・授業参加で検討が必要なことに関しては、特別支援教育コーディネーターや担任が窓口となり、検討をした。 ・医師の指示により、側弯防止や休息のための場所、時間を確保した。	事例15
○授業 ・挙手の際には、棒を使用し、教師に伝わるようにした。 ・教科書等の出し入れは、支援員がサポートした。 ・実技教科に関しては、支援員のサポートを受け、可能な限り参加した。 ・体育は見学やレポート作成等を行った。 ・座席位置の調整や本生徒用の机などの整備を行った。	事例15
・携帯電話は学校では担任が預かり、下校時にまた生徒へ返すようにした。	事例17
・スケジュール管理は、大まかなスケジュールを決め、貼り出すなど「見える化」した。	事例17
・書く量を自分で調整するように促した。	事例18
・視覚補助具(ルーペ、単眼鏡、書見台)を使用した。	事例19

・教室の座席を最前列、廊下側にした。	事例19
・拡大教科書を使用した。	事例19
・電子黒板を手元のタブレットに映し出した。	事例19
・黒板の文字を本児の見える大きさに書いた。	事例19
・グループ活動では、大きなホワイトボードを使用し、話し合った内容について、対象児童が自信を持って記入できるようにした。	事例19